



クワインの認識論 : 認識論と存在論の相互包摂の解明

成瀬, 尚志

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2007-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4109

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004109>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	成瀬 尚志
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 692 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 19 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

クワインの認識論－認識論と存在論の相互包摂の解明

審 査 委 員

主 査	教 授	松田	毅
	教 授	嘉指	信雄
	准教授	羽地	亮
	順心会看護医療大学	教授	山本 道雄
	大阪市立大学文学研究科	教授	美濃 正

本博士論文の目的は、20世紀の英米系の哲学に多大なる影響を与えたウィラード・ヴァン・オーマン・クワイン（Willard van Orman Quine）の認識論を検討し、その内実を解明することである。クワインは、認識論、存在論、論理学、数学の哲学など幅広い分野で偉大な業績を残したが、それにともない、多くの批判も招くこととなった。そこで本論文では、クワインの認識論に焦点を当て、これまでの批判を検討することでクワインの認識論がどのようなものであるかを明らかにすることを目的とする。

クワインの認識論は自然化された認識論として知られており、その自然主義的性格により批判されてきた。したがってそれらの批判を検討するために、自然主義を前提とすることは説得力を欠くであろう。よって本論では、自然主義を前提とするのではなく、議論の結論として自然主義がどのような立場であるのかを浮かび上がらせる。

クワインは自身の自然主義を端的に「科学に科学を適用すること」と表現している。科学の正当性を明らかにすることは認識論の一つの課題であったといえるが、そのために科学を利用することは、これまでであれば循環であると非難されてきた。しかし、あえてクワインは認識論を遂行するために科学に科学を適用する。ではなぜクワインにとってそのことは問題とならないのであろうか。それには認識論と存在論の相互包摂（reciprocal containment of epistemology and ontology）テーゼが関わっている。本論ではクワインの様々な議論を整理し検討することで、クワインがいかにかしてこのテーゼにたどり着いたのかを見ていく。

クワインはあらゆる存在者は指定物に過ぎないとする。その一方で、クワインは頑強な実在論（robust realism）を主張し、科学者が存在者とみなすものをそのまま実在として受け入れる立場をとる。また、認識論においては、科学の妥当性を前提とし、現行科学によって提供される「刺激」という概念を認識論の基礎にする。このように、クワインの認識論、存在論の分析はわれわれが証拠とみなしているもの、あるいは、存在者とみなしているものの分析に過ぎないという言い方ができる。しかし、そうしたわれわれの信念は単なる幻想や思い込みに過ぎないという可能性は十分にある。哲学の仕事は表層的なわれわれの臆見に深くメスを入れ、その不十分さを理解し、真知を探求することであったことはその証拠であるとも言える。こうして、これまでの哲学では、われわれのもっている表象や信念が知識としての身分を欠いているという自覚から、それらを支えることのできる基礎を探求してきた。その基礎として、選ばれたものには幅があったものの、それらの身分自体に対する疑いは共通であったといえる。

しかしクワインはその疑いを共有しない。というも、その疑いが有意味なものとなるのは、表象や信念とは異なる身分の存在にコミットしている場合であるからであるが、そうしたものを認めることができるかどうかは明らかではないからである。表象や信念の身分を脅かすものとしてこれまで考えられてきたのは、真理、規範、意味、などである。これらがどのようなも

のであり、どのようなものとして理解するのがもっとも理にかなっているかをクワインは検討している。本論文においてもこの議論は大きな論点の一つである（第一章）。その議論には翻訳の不確定性テーゼや、存在論的相対性、真理の引用解除説、などが含まれ、どの論点も多くの議論を巻き起こしたものである。よって、本論においてもそれらの批判を念頭に、クワインがどのような議論を行っているのかを明確にした。その論点において重要であるのは、クワインがその議論をする際には自然主義を前提しておらず、自然主義の議論自体とは区別して論じることが可能であるということである。

こうした分析を通して、クワインは存在論と認識論について次のような見解を持つことができるようになる。存在論とは何が存在するかを問うものであるが、その探求の際には「われわれの認識が証拠にできるものは体表刺激しかなく、それ以外のものを証拠にすることはできない」という認識論的な前提を受け入れることができるようになる。また、認識論とはわれわれの認識の正当性を示すためにどのようなものを証拠にすべきかを問うものであるが、その探求の際には「認識論が探求すべき証拠は、あくまでわれわれが受け入れている理論や存在者に対する証拠である」として、理論や存在者に関する存在論的前提を受け入れることができるようになる。このように認識論的な問題を問う時には存在論に足場を置き、逆に、存在論的な問題を扱う時には、認識論に足場をおくことができるようになる。というのも、それら二つの学問領域をそれぞれ独立したものであると考えることができないということをこれまでの議論で示したからである。これが認識論と存在論の相互包摂テーゼである。このようにこのテーゼは議論の前提ではなく結論であるということを本論文では示した（第2章）。

こうしてクワインは認識論と存在論の相互包摂テーゼにたどり着く。つまり、認識論と存在論は個別の自律した学問分野ではなく、それぞれわれわれの認識活動（あるいは科学）の内部に位置する領域のことであることがわかる。そしてこうした議論の帰結として、クワインはノイラートの船の船員であることを決意する。このように認識論と存在論を検討することによって、クワインが批判した第一哲学（first philosophy）あるいは伝統的認識論というものが明らかとなる。それらは、この相互包摂テーゼを否定し、両者が自律的な学問領域であるとする立場のことであり、単に「基礎付け主義」で片付けられない広い外延をもっていることがわかる。また、このように理解することで、クワインの立場の中でも特に批判の対象となった、彼の物理主義に対しても新たに理解しなおす必要が出てくる。クワインがホーリズムからあらゆる信念に改定の可能性を認めているにもかかわらず、彼が物理主義的な存在者に特権的な身分を与えているのは確かに疑わしい。しかし、その疑わしさは認識論と存在論とがそれぞれ独立しているということを前提にしているのではないだろうか。このように相互包摂性テーゼの検討はクワイン哲学を理解する上で大きな意味を持つことがわかる。物理主義は確かに存在論的な立

場である。しかし、特定の物理的存在者にコミットしているわけではない。彼の物理主義という存在論は、彼の認識論的な立場と密接に関わっているのである。さらに、その物理主義の立場から、クワインはわれわれの認識プロセスの因果的な分析をし、その因果的な分析が認識論の課題であるとするが、その見解も相互包摂テーゼに依存したものであることがわかる。これらのことを念頭に第3章ではクワインに向けられた批判を検討した。

以上のような議論を通して明らかにしたいのは、クワインの認識論の目的はわれわれの「表象を救う」ことである、ということである。われわれは表象（あるいは信念）をもっている。しかし、それらは錯覚や思い込み、または、理論的あるいは文化的偏向により、信頼性を欠いているとされてきた。そうした考えは懐疑論に格別の哲学的価値を見出さない哲学者にとっても共通のものであったといえる。もちろん、個別の表象が改定を受けることがあるということは言うまでもない。しかしそれは表象という身分自体に問題があるという主張とは区別されるべきことである。クワインは表象とは異なる身分を持つとされてきたものを検討することにより、それらが表象の身分を脅かすようなものではないということを論じた。このようにクワインの認識論は「表象を救う」ことによってその課題を果たそうとするものである、ということの本論で示した。

ではクワインの言うようにわれわれの表象が救われた場合、認識論はどのようなになるのか。われわれの表象が認識の中で正当な身分を回復したからといって、認識論が不必要となるわけではない。その場合にこそはじめて本当の意味で認識論が必要となるのである。というのも、表象は当然ながらすべてを受け入れることはできないからである。しかし、表象が救われた今、かつてのような正当化や基礎付けはもはや必要がない。求められるのは表象や信念の「分類」あるいは「整理」である。どのようなものが信頼できるか、またはできないのかを整理していくことが必要なだけである。その作業にこれまで蓄積された叡智を利用することにはもはや抵抗感を感じられないだろう。われわれは現行科学を利用して認識論の課題を遂行することができるのである。そのようにして自然化された認識論がどのようなものであるのかを第4章で考察した。

このように、広い意味でのクワインの認識論は二層構造になっている。つまり、一方は表象を救うための議論であり、ここには「翻訳の不確定性テーゼ」「存在論的相対性」「ホーリズム」などが含まれる。さらにその議論で得られた見地から自然主義をとり、認識論を自然化することでわれわれの認識を分析する議論である。ここにはじめて「刺激から科学へ」とつながるわれわれの認識プロセスを研究する議論や物理主義の立場が含まれる。このようにクワインの議論を整理することが、クワインにこれまで向けられてきた多くの批判に対する返答となると考える。そして、このようにクワインを理解することではじめてクワインの論敵であった、カル

ナップやデイヴィッドソンとの相違も理解できるようになる。クワインの主張が、デイヴィッドソンやカルナップらのそれと個別の議論において異なっているのは当然容易に見てとることができる。しかし、認識論に取り組む全体的なスタンスにどのような相違があるのかを理解することはそれほど容易ではない。それは彼らの相違が曖昧からではなく、これまでクワイン哲学が正確に把握されてこなかったからである。彼らとの相違を理解することはクワインを理解する上でも、また認識論を理解する上でも非常に重要なのである。よって本論文では結語においてその点を論じることで、クワインの認識論の意義がどのようなものであるかを示した。

論文審査の結果の要旨

氏 名	成瀬 尚志
論文題目	「クワインの認識論 認識論と存在論の相互包摂の解明」
要 旨	
本論文は、クワインの「自然化された認識論」を論じたものである。代表的なクワイン批判を検討し、自然主義を前提ではなく、認識論の結論として解明することで、自然化された認識論を「認識論と存在論の相互包摂」の立場として解釈するものである。第1章では、クワインの真理観と認識論上の規範論論じられる。また第2章では、認識論上の懐疑論との対決および認識論と存在論の相互包摂のテーゼが論じられる。第3章では、デイヴィッドソンによるクワイン批判を検討し、行動主義と物理主義の問題が検討される。第4章では、自然化された認識論と伝統的認識論との関連が論じられ、クワインの認識論の特徴が明らかにされる。以下、各章の内容を簡単に紹介する。 第1章では、伝統的認識論の真理概念に対するクワインの見解に関する考察が注目される。真理の引用解釈に立つクワインが、真理は理論内在的であるが、絶対的に判定できると主張する点を捉え、言語や理論の相対性は、科学理論の周辺に位置する観察文が、刺激を通して外的世界の状況に因果的に条件付けられている以上、観察文の絶対性、つまり同意・不同意の揺るぎなさを費さない点が論証される。論文の構成として、クワイン哲学の出発点、「経験論の二つのドグマ」の批判から全体論と自然化された認識論への道が開かれた点の考察が手薄であった点が惜しまれるが、自然化された認識論にはそぐわない「超越的真理観」への拘りがクワインにあった点を指摘し、それを整合的に解釈しようとした点は評価されてよいだろう。 第2章では、伝統的認識論と懐疑論の問題に対する分析が重要である。外的世界に関する知識の妥当性を問うストラウドの議論は、世界と不可分の被験者の信念内容にあえて距離を置く哲学的視点を取り、その視点から知識の評価を行うと、懐疑論は避けがたい、という前提に立つ点を問題にする。ストラウドの思考実験に即した批判的分析から「言語と世界」の外なる視点に立つ認識論を否定するクワインの立場の優位が論じられる。またこの章では論文の副題「存在論と認識論の相互包摂」のテーゼが説明されている。知覚不可能な「分子」の存在仮定が知覚可能な現象の説明に役立つことから、科学における存在論と認識論とは独立に考えられない点が例示される。この意味の相互包摂を、「知識の正当化」を論じる伝統的認識論の問題設定と対照することで、「知識の説明」を行う自然化された認識論の特徴が浮き彫りにされる。ストラウドに関する批判的考察に難点がないわけではないが、我が国ではまだあまり知られていない哲学者にまで視野を広げ、果敢に伝統的認識論の問題に挑戦することで自然化された認識論の特徴と利点を的確に際立てた点は評価すべきである。	

主査記載
氏名・印

松田 毅

第3章では、根元的翻訳の問題に関するデイヴィッドソンへのクワインの応答およびクワイン哲学の中にある物理主義と行動主義の緊張関係の考察を通して、自然化された認識論の認識論上の利点が示される。クワインは、刺激に直接条件付けられた観察文を被験者の体表刺激である近位的刺激に結びつけた点を批判され、意味論上の近位説を放棄し、体表刺激を証拠と見なす認識論上の近位説を残したが、近位説は懐疑論を招く「内容と図式との二元論」を含む、という批判に対してクワインの認識論上の近位説が擁護される。また、従来から批判的集中してきた物理主義の問題も認識論上の問題として行動主義の観点から理解し直されている。確かに、認識論上の近位説は、翻訳を行う言語学者の理論が外部世界に因果的に依存する点を客観的に説明できる、などの利点をもつ点は認められるが、対象や状況である遠位的刺激に基づき、翻訳を言語学者の立場から考察するデイヴィッドソンの遠位説を退けるところまで本論文の論証が十分に進んだとは言えない。しかし、先行研究を参照しながら、デイヴィッドソンの言語哲学とクワインの認識論双方の特徴を押さえた上で、自然化された認識論の利点を論じる態度には見られるべきものがあると言える。

第4章では、自然化された認識論と伝統的認識論とが比較され、自然化された認識論の独自性が示される。自然化された認識論は、受け継がれた世界の理論の内部から知識の体系を理解、改良する立場として、心理学を用い、感覚刺激の過程を予知する工学の形で規範的認識論の課題を引き受ける点が述べられる。その場合、心理学だけでなく、統計学が例に挙げられ、自然化された認識論は、科学を利用しながら科学の営みを解明する弱い自然主義として特徴づけられている。自然化された認識論との対比で描かれる、アプリアリナ原理に基づき、科学をその絶対確実な基礎へと還元する伝統的認識論という姿は、歴史上の認識論の多様な形態から見れば、単純に一面化されたものであると言わざるをえず、不満が残ることも否めない。しかし、自然化された認識論を選ぶ理由として、現在のところ科学が最も優れた知識獲得の方法であり、そのために科学の方法を採用する十分な理由があるとされる点には、一定の説得力がある。自然化された認識論を哲学として生かす路線が正しいかどうかは、論文執筆者の研究も含め、自然化された認識論の今後の展開次第とも言えるが、現代哲学の一つの有力な選択肢であることは確かである。

論文全体として、問題設定、論証の構成順序や多様な諸概念の整理についてなお改善の余地があることは否定できないが、ストラウドやデイヴィッドソンのように、クワインと対立する現代の分析哲学の代表的研究者のクワイン批判にまで視野と研究を広げ、きわめて論争的な論陣を張り、そこから独自の興味深いテーゼを提起し、論証していることは、哲学研究の基本姿勢として高く評価できる。

以上の点で、本審査委員会は、論文提出者成瀬尚志氏が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	松田 毅	副 査	教授	嘉指 信雄
副 査	准教授	羽地 亮	副 査	名誉教授	山本 道雄
副 査	大阪市立 大学教授	美濃 正			